

「今月になって親類、昔機能も変わり、家族と地域の同僚、友人・知人、4人とのかわり方も変わった。葬儀に参列しました。現実。葬送習俗そのものが大投を返くと暇はあるのです。大きく変容した今日、香典文化が、香典のお金の工面が大変です」。近ごろ、とみに高齢者から聞く嘆きである。

香典は、葬儀が地域のオフィシャルな事業であったことに起因する。葬儀は、家族が行うものではなく、

## 人生締めくくりに

自分らしく最期

島崎 知成

⑨

地域の共同体が主催するもので、血縁・地縁の相互扶助を支える術だった。形は多少変わっても、薪一束、米一升を持って駆けつける」を今日に至るまで継承している地域があることを見れば、相互扶助と、葬儀にかかる費用の調達システムの本幹が香典に凝縮されていることがわかるだろう。

に、比較的簡単に資金が調達できる方法なのだ。香典返しを準備したり、香典をいたいた人の身内に不幸があったときには相応の額の香典を包むことなどを考える。実は、金利数百分にも上る、非常に高利な資金なのだが、普段、そのことには気づかない。

また、「香典のやりとりはしない」とどちらが決めたとしても、一方的に断つ

## 高齢者の香典貧乏

のはとても難しい。わが国の社会では、不幸があったときに香典をやり取りする程度の「葬式づきあい」という付き合い方すら存在する。最近「香典供花辞退」という死亡広告も多くなったが、それでも式場に行ってみると、供花が多数供えられていたり、受付があったりして戸惑うことも珍しくない。私自身も、4年前に母が亡くなったとき、香典をいたたかなという主義主張を完全に貫くことはできなかった。

無念さと、2人の子どもに大きな借財を残してしまったという後悔は大きい。「香典文化」が各種のお祝いなどの「コミュニケーション文化」とその質を異にするのは、「相互扶助」の概念が基本にある点だ。Aさんから父の葬儀で香典をいたたいた場合、Aさんの身内に葬儀があれば、「お返しをしないとすつと心の中で借りになる」という極めて日本人的な文化的背景があるのだ。

毎週木曜日に掲載



生前契約を結んだ本人の希望で、簡素ながら黄色の花を集めて作った祭壇。葬儀の形はどう変わるのか

香典の習慣が無くなれば葬儀の形も変わり、葬儀業界も変わるだろう。しかし、そのためには、とって代わる新しい文化装置が必要だ。(NPO法人代表)

老いじたく読本